特集 3・11

語り継ぐ

2011年3月11日、14時46分
未曾有の大災害が東日本を襲った。

「東日本大震災」
国内観測史上最大の地震が大津波を生み、
かけがえのない命、暮らしを奪った。

あの日から10年。
岩手県は今年、3月11日を
「東日本大震災を語り継ぐ日」と条例で定めた。
あの日あの時、何が起きたのか。
そして、私たちは今日から何ができるだろうか。

国内観測史上最大M9.0の地震 東日本大震災発生

平成23年3月11日、午後2時46分18秒、三陸沖・牡鹿半島の東南東約130キロメートル付近を震源とする巨大地震が発生した。携帯電話の緊急地震速報が異常を告げ、激しい横揺れが数分間続いた。地震の規模を示すマグニチュードは国内観測史上最大の9.0。東日本の広範囲を強い揺れが襲った。宮城県栗原市で最大震度7、県内8市町村で震度6弱を観測した。地震から間もなく、東方の海上から沿岸市町村に津波が押し寄せた。最大浸水高は18.3メートル(観測地点：釜石市両石湾)を記録する大津波だった。政府は同年4月1日、この災害を「東日本大震災」と命名した。

本市では震度5強を観測。家屋の損壊、漏水・断水などの被害が発生した。市内全域で停電し、電話は不通。停電は2～3日続いた。物流が停止し、深刻な燃料不足に陥った。通信手段やライフラインは絶たれ、暮らしが一変した。

国の東日本大震災復興対策本部は当時、被害が甚大かつ広範囲、地震・津波・原子力発電施設の事故による複合的な災害で影響が全国に及んでいることから、「未曾有の国難」とも表現した。全国の死者・行方不明者は約1万9千人(平成24年12月26日時点)。建物の全壊・半壊は約39万戸以上で、ピーク時の避難者は40万人以上とされる。令和元年11月30日時点で、県内の死者数は514人、行方不明者数は1112人。本市では沿岸市町村に滞在していた8人の尊い命が失われた。

災害対応に奔走しながら 後方支援活動展開へ

地震発生と同時に市は災害対策本部(本部長・本田市長)を設置。災対本部は、市民の暮らし、命を守る災害対応の中枢となる組織だ。市庁舎前の駐車場に設営したテントを拠点に被害状況の把握、ライフライン復旧に奔走した。発災後も激しい余震が断続的に続いた。市内で観測された余震は平成23年10月12日までに787回を数え、震度5強を4回観測している。地震発生後の15時28分には市内全域に避難勧告を発令。市内地区センターなどに避難所が開設された。自治会が自主的に開設した避難所を含めると、市内に設置された避難所は最大50カ所。避難者数の総数は2027人に上った。避難所では消防団員や民生委員をはじめとする地域住民が率先して避難所運営や安否確認に奔走。市民ボランティアによる炊き出しも行われ、避難者の心身を安らげた。

地震発生直後、自衛隊や警察隊、消防隊、医療隊などが被災地救援に動き出した。市災対本部は地震発生から14分後の15時、遠野運動公園の受け入れ準備を始めた。17時40分には岩手県警機動隊が遠野入り。その後、全国から続々と救援部隊が集結した。3月20日時点で31組織、約3500人が本市に集結。運動公園や遠野緑峰高校体育館、自治会館などが救援隊の活動拠点となった。

地震発生から11時間後の深夜1時40分、佐々木励(つとむ)さん(釜石市)が市災対本部へ駆け込んできた。佐々木さんは妻が勤める大槌高校から土坂峠、立丸峠を越えて遠野へ。沿岸自治体の被害状況を訴え、本市に助けを求めた。佐々木さんのSOSで窮状が明らかとなり、本市の後方支援活動が本格的に動き出した。

東日本大震災の概要

■地震
- ■発生日時　平成23年(2011)3月11日、14時46分18秒
- ■震央地　三陸沖・牡鹿(おじか)半島の東南東約130キロメートル付近
- ■モーメント・マグニチュード　9.0(国内観測史上最大)
- ■最大震度　震度7(市内では震度5強)

■津波 ※県内
- ■**津波の観測地(検潮所)**　宮古市8.5メートル以上、大船渡市8.0メートル以上
- ■**最大浸水高**　18.3メートル(釜石市両石湾)

■全国の被害 ※資料:復興庁／平成24年12月26日現在
- ■死者・行方不明者　約19,000人
- ■建築物の全壊・半壊　39万戸以上
- ■ピーク時の避難者　40万人以上
- ■停電世帯　800万戸以上
- ■断水世帯　180万戸以上
- ■被害額　16兆～25兆円(本市は約32億円)

発災～24時間 アーカイブ3.11

市災害対策本部の主な動きを基に振り返る。

2011.3.11　14:46～(PM)

■発災、状況把握に奔走

遠野市災害対策本部設置。市内全域で停電。電話不通。断水や漏水など発生。市役所中央館全壊。

15:00(PM)

■遠野運動公園開放指示

全国からの救援隊受け入れに向け運動公園の開放準備へ動く。

15:28(PM)

■避難勧告(避難所開設)

避難所を開設。市内の避難所は最大50カ所、避難者総数は2,027人に上った。

あの日から

■ライフライン混迷

給油所には長蛇の列、店の食料品は品薄に。社会が混迷した。

2011.3.12　1:40(AM)

■深夜のSOS

佐々木励さん(釜石市)が大槌町から2つの峠を越えて本市災害対策本部へ。窮状が伝えられた。

後方支援、展開

地震発生後、被災地での救援活動を展開した救援部隊の拠点となった本市では、後方支援拠点の構想を形にし、訓練を生かし、官民連携による後方支援活動が行われた。被災地への思いをひとつに、つながった人々の絆が後方支援の大きな原動力となった。

1＿自衛隊と消防隊が集結した遠野運動公園（３月14日、自衛隊撮影）　2＿世界中からボランティアが集結。市、遠野市社協、遠野まごころネットなど官民が連携して活動の一大拠点になった　3＿物資を仕分ける市民ボランティア。稲荷下屋内運動場が物資センターとなり、全国からの救援物資を集積・運搬した　4・5＿市民ボランティアらが炊き出しを実施。29日間で約14万個のおにぎりを握り、メッセージを添え被災地へ送り届けた

海がない、津波が来ない。
だからこそ、
遠野が果たすべき役割がある。

「官民連携」「水平連携」遠野モデルの後方支援活動

10年前、本市が担った役割が遠野モデルと称される「沿岸被災地後方支援活動」だ。自衛隊や消防など、救援部隊の活動拠点となっただけでなく▽市民ボランティアによる約14万個のおにぎり炊き出し▽10万人を超えるボランティアの受け入れと展開▽全国からの支援物資の集積・搬出――など、市民と行政、関係機関団体が全国から駆け付けた人々と思いをひとつに、「官民連携」による後方支援を展開した。とりわけ、国・県・市町村の縦割りの関係ではなく、平時から顔の見える自治体間の横のつながり「水平連携」が迅速な支援を実現。災害時の有効性が証明された。その後、宮崎県都城市（みやこのじょうし）では南海トラフ地震に備えた「後方支援拠点都市づくり」が進められるなど、後方支援の仕組みは全国に広がりを見せている。遠野の後方支援は、全国の防災対策の先進的モデルとなっている。

生かされた訓練、巨大地震への着実な備え

震災前から、巨大地震「宮城県沖地震」が30年以内に99パーセントの確率で発生すると予測されていた。本市は、沿岸と内陸を結ぶ遠野の地理的条件などから果たすべき役割、使命を認識。後方支援拠点整備の構想を持ち、関係機関との調整、支援体制構築に向けた大規模訓練を実施してきた。

平成19年、宮城県沖地震を想定した県総合防災訓練が本市で行われた。県内87機関、8749人が参加した。同訓練は本来、開催自治体の被災を想定して行うもので、後方支援を目的とした訓練は異例だった。同年11月には釜石・宮古・大船渡・陸前高田・住田・大槌・山田・川井（現宮古市）と本市が「三陸地域地震災害後方支援拠点施設整備推進協議会」を設立。後方支援拠点整備の必要性を国や県の関係機関約80カ所に訴えた。

翌20年10月には東北方面隊震災対処訓練（みちのくアラート２００８）が本市と宮城県で２日間の日程で開かれた。訓練では本市を後方支援拠点に、▽情報収集▽人命救助▽炊き出し――などの訓練を実施。東北6県所在の自衛隊と岩手・宮城両県の自治体や警察、地域住民など総人員1万8千人が参加した。規模・内容ともに全国に類を見ない大規模訓練だった。

10年前、後方支援活動を可能にした背景には沿岸部と本市の歴史的つながりに加え、事前の備え、訓練があった。そして、被災地に寄り添い、支え合う人々の思いが絆となって、後方支援は実践された。

もうひとつの後方支援

命をつなぐ道を啓（ひら）く

㈳岩手県建設業協会遠野支部は発災後、発電機や照明器具などの設置に尽力。震災翌日から被災地で通路の確保や、がれき撤去に従事し、救援活動を支える命の道をひらいた。

文化復興プロジェクト

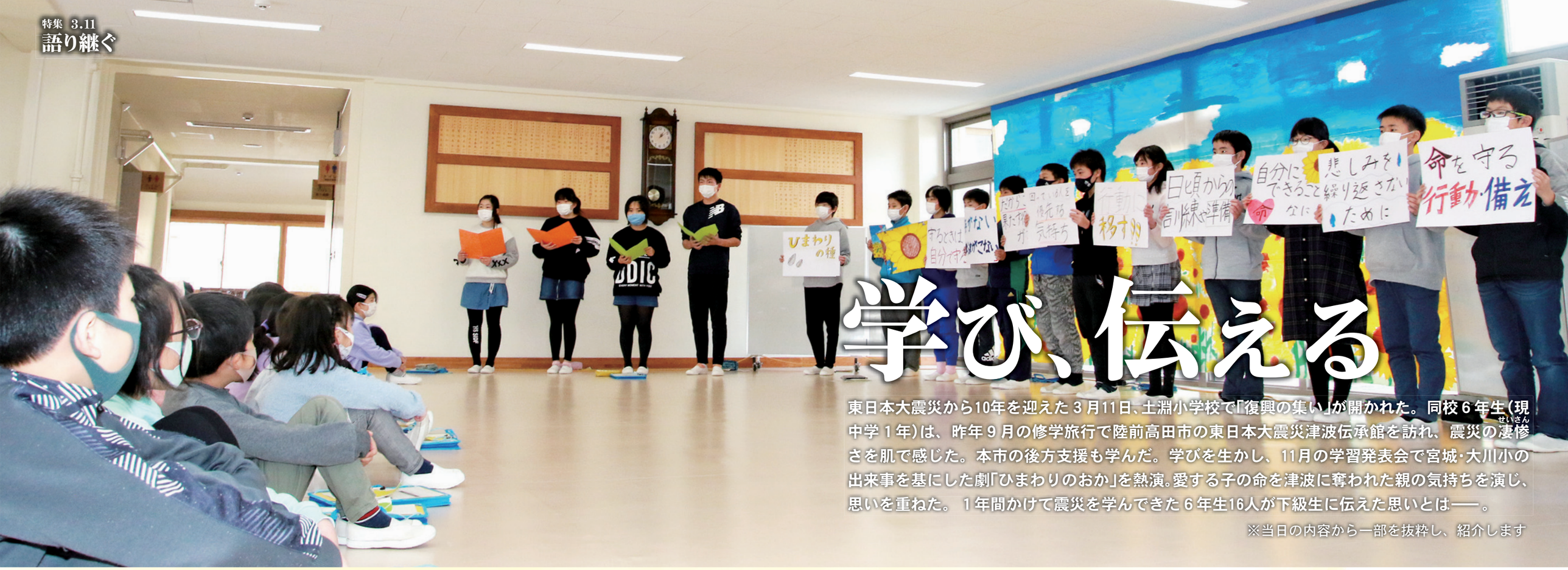
平成23年６月12日、遠野文化研究センターがけん引役となって、「献本活動」「文化財レスキュー」「情報発信」を活動の柱に被災地の地域文化復興支援プロジェクトを展開した。

絆 2021.3.11メッセージ

元陸上自衛隊第９後方支援連隊長
六車（むぐるま）　昌晃（まさてる）さん（東京都）

遠野市民の手によって作られ、あらゆる困難を克服して被災地に輸送された１個のおにぎりによって、津波で打ちのめされた被災者がどれほど勇気付けられたことでしょう。今では遠野モデルとして定着した沿岸被災地後方支援は画期的なことでした。また、遠野市に展開した自衛隊、警察、消防なども皆さまに大変お世話になり、円滑に人命救助活動などをすることができました。本当にありがとうございました。

⬅平成23年７月25日、撤収セレモニーで花束を受け取る六車元連隊長



学び、伝える

東日本大震災から10年を迎えた３月11日、土淵小学校で「復興の集い」が開かれた。同校６年生（現中学１年）は、昨年９月の修学旅行で陸前高田市の東日本大震災津波伝承館を訪れ、震災の凄惨（せいさん）さを肌で感じた。本市の後方支援も学んだ。学びを生かし、11月の学習発表会で宮城・大川小の出来事を基にした劇「ひまわりのおか」を熱演。愛する子の命を津波に奪われた親の気持ちを演じ、思いを重ねた。１年間かけて震災を学んできた６年生16人が下級生に伝えた思いとは――。

※当日の内容から一部を抜粋し、紹介します

ちょうど10年前の今日、私たちがまだ2歳だった頃、東日本を大きな地震が襲いました。
マグニチュードは9.0で、歴史的に見ても最大規模の地震だったそうです。
その影響で、地震から数分後に大津波が発生し、東北地方を襲いました。

たくさんの大切な命、家や街、みんなのいつもの生活を奪っていきました。
当時の記憶はないのですが、想像ができないほど辛く、悲しい出来事だったのだと思いました。

私たち6年生は、修学旅行で東日本大震災津波伝承館に行きました。
学んだことを生かし、学習発表会で劇「ひまわりのおか」を披露しました。
劇を通して、命は大切なものだということを改めて感じました。

私は「ひまわりのおか」の本を読んだり、震災の話を聞いたりして、
命は一度失ったら二度と戻らないことを知ったからです。
私は、お家の人からたくさん話を聞いて、
私の命は家族に愛されて育った宝物だと知ったからです。
私は、自分の命はたくさんの人に支えられていると思っています。
でも、守る時は自分で守らなければならないものだと考えます。

私たちが劇で演じた子どもたちのほかにも、
たくさんの宝物の命が奪われてしまったことは悲しいことです。
では、二度とそんな悲しい思いをしないために、
できることはあるのでしょうか。

地震は必ずこれからも起きます。
止めることはできなくても、私たちにできることはあるのです。
10年前、私たちの住む遠野市がそれを実践していました。
被災地への後方支援です。
遠野は県内において沿岸地域への交通が便利な場所に位置しているため、それが支援に役立ちました。

「海がない、津波が来ない、だからこそ果たすべき役割がある」
という言葉があります。
他の市町村のために素早く行動していたことを知り、
困っている人を優先する気持ちが大事だと思いました。
私は、食べ物を送ったり、ボランティアの集結場所になったり、
自分たちにできることを考えて行動に移すことが大切だと思いました。
災害で亡くなった家族、友達の思いを考えると辛い気持ちになりました。
でも、その思いを劇で演じ、伝えたことで、
悲しみを繰り返さないために何ができるか考えることができました。
自分の命を大切にすること、
そして、命を守るための行動・備えが必要だと思いました。

「ひまわりのおか」で、子どもたちを失った母親たちは
たくさんのひまわりを植えました。
これは、悲しみはあっても、
前を向いて歩いていく希望の象徴だと私たちは考えます。
東日本大震災から10年。
私たち一人一人にできることを考えていきませんか。

「家族から愛されている自分の命を守る」
「困っている人がいたら声をかける」
「進んでボランティア活動をする」など、
身近なことからでも良いと思います。
その一人一人の行動が、思いが、ひまわりの種です。
その種を心の中で育て、みんなでたくさんの花を咲かせることが、
この土小復興の集いのゴールだと考えます。
思いを持ち、行動に移し、僕たちと一緒に、
土小にたくさんのひまわりを咲かせましょう。

受け継ぐ

「災害は、いつどこで起こるか分からない」。防災を学ぶうえでよく耳にする言葉だ。
震災から10年。震災を知らない世代は増え、教訓を語り継ぐ取り組みが続いている。
過去の教訓から私たちは何を学び、自然災害にどう向き合えばよいのだろうか――。

●Report　講話内容の一部を紹介

自然災害の猛威に備える心構えと、自然への畏怖（いふ）、畏敬（いけい）の念を忘れてはいけない

3月7日、市民センター大ホールで防災の集いが開かれた。災害対策の第一人者で、遠野市東日本大震災10年後方支援活動伝承懇談会座長を務めた齋藤名誉教授が講話。参加した市民約150人が次世代への教訓の伝承と備えの大切さを胸に刻んだ。遠野が伝えていくべきこと、自然災害への心構えを学ぶ。

岩手大学名誉教授
工学博士
齋藤　徳美（とくみ）さん

記憶・伝聞は薄れ風化してしまう。「さぁ、復興の道をつなげよう」。遠野から沿岸への道中、心強く励まされた。震災ではそれぞれの立場、使命感のもとで闘ってきたのだと思い返している。遠野は50キロ圏内で内陸・沿岸へと道がつながる扇の要。沿岸地域被災時の大きなカギとなる。後方支援拠点となった運動公園には総合防災センターが開設された。非常に頼もしい体制が完備された。もちろん二度と津波は起きてほしくないが、三陸に津波というのは持病である。その時には、経験・教訓というものが重要になる。

後方支援資料館には生きた教訓、1日かけても見切れないものが展示されている。後方支援であるならば運動公園。この地にあってこそ生きるだろうと思う。遠野市の後方支援は一朝一夕ではない。本田市長とは、ずいぶん前から「遠野は沿岸が被災した場合の後方支援拠点になる」と話していた。構想、訓練があっての後方支援。南海トラフ巨大地震などの対策に、東日本大震災の対応が注目されている。後方支援をどうするのかという時に、その実践例は遠野にしかない。教訓を詰めているのが後方支援資料館である。

震災から10年経ってしまった。記憶はだんだん薄れる。20年、30年経ったら、経験した人はいなくなってしまう。いつ起こるか分からない災害に備える遠野市民の心構えを忘れないでほしい。次世代にも伝えなければいけない。できれば資料館を学校の防災教育、町内会や老人クラブの旅行などで活用してほしい。この地で何が起きたのか、私たちに何ができるのかを学ぶ生きた教材になる。

私たち人間の歴史は、暦を数えては2千年余。地球は46億年。自然災害は地球の息吹であり、繰り返し起きる。便利な生活をし、うまいものを食べ、人間様は偉いという傲慢（ごうまん）な姿で、何でもコントロールできると錯覚に陥っているのが今の人間。

人間は今までも、自然の中で生かされてきた。今も生かされており、これからも生かされていく。自然に対する畏怖、そして敬うことをもう一度思い起こして生きていく。このことが、自然災害から身を守る一番大事な原点ではないかと思う。

後方支援の教訓展示、資料館リニューアル完了
あの日の記憶、教訓を伝える拠点

後方支援資料館が3月7日、リニューアルオープンした。資料館は市総合防災センター隣に常設化。後方支援活動の記録や震災遺産を展示しているほか、遠野テレビの映像を放映するスペースを新設。鉄骨平屋プレハブ造りの約200平方メートルで、整備事業費は約2,100万円。記憶を記録し、伝承する施設として活用が期待される。

3.11東日本大震災遠野市後方支援資料館

■**開館日時**　全日9時～17時（年中無休、入場無料）
■**問い合わせ**　市防災危機管理課（☎62-2111内線121、122）

●Interview　インタビュー

所属・学年は取材日時点（3月）

佐々木　風香（ふうか）さん
＝遠野西中2年＝

震災の記憶はあいまいだったけれど当時の映像や写真を見て被害の大きさが分かった。誰かを助け、自分も助かるために、「備え」を大切にしたい。中学生がおにぎりを作っている映像を見て、災害時は自分で気付き、自分ができることをしたいと思った。

【3月10日】遠野西中で東日本大震災復興祈念集会が開かれ、生徒112人が震災を学び、自分にできることを考えた。

菊池　隼翔（はやと）くん
＝土淵小6年＝

修学旅行で陸前高田市の津波伝承館を見学した。津波や地震の怖さを実感した。震災を学び、他の人を助けるためには、まず自分の命を守ること、「津波てんでんこ」の言葉の大切さが分かった。命を守るために、日頃の備えと避難訓練を大事にしたい。

【3月11日】土淵小の復興の集い（12ページ）では、児童77人が「復興宣言」として学びから得た気付きを書き記した。

熊谷　綾乃（あやの）さん
＝大迫高校1年（花巻市）＝

初めての震災学習。後方支援の取り組みを知り、人とのつながり、互いに支援し合う大切さを学んだ。心に傷を負った人の気持ちを理解するのも人としての役目だと思う。災害時は自分のことだけでなく、ボランティアなどで人の役に立ちたい。

【3月3日】大迫高1年生24人が市総合防災センターと改装中の資料館で震災学習。その後、大槌町へと向かった。

命を守るため。語り継ごう。備えよう。

2月、3月と2度、携帯の緊急地震速報が鳴り、緊張が走った。
巨大地震が起きたらと想像すると、自然災害への備えと心構え、教訓を語り継ぐことが大切なのだと改めて気付かされる瞬間だった。

10年前、巨大地震・大津波が大切な命、暮らしを奪った。
10年が経ち、教訓を次世代へと語り継ぐ取り組みが求められている。

被災地を思い、多くの人たちの手によって行われた「後方支援活動」。
被災地へ向かう支援者を支援した人たちがいたことも忘れてはいけない。
それぞれの立場、状況、使命感の中で、数えきれない絆が生まれた。

「100回逃げて、100回来なくても、101回目も必ず逃げて」
釜石市唐丹町の津波記憶石に中学生の言葉が刻まれている。

本市でも水害は他人事ではない。
平成28年の台風10号では甚大な被害が発生した。
いつ、どこで起こるか分からない自然災害にどう向き合えばよいのか――。

岩手大学の齋藤名誉教授は本市防災の集いの中で、
自然災害は地球の息吹と表現。
自然への畏怖、畏敬の念を忘れてはいけないとも伝えた。

市内小学生は、「地震を止めることはできないけど、私たちにできることはある。」
「自分の命を大切にすること。命を守るための行動・備えが必要」と伝えた。

「いつ、どこで、何が起こるか分からない。命を守るために備え・対策を家族で話してほしい」
追悼式取材後の帰り道、本市に移り住んだ伊藤定夫さん(大槌町出身、穀町)に、
「少しでもいい、どうか伝えてほしい」と呼び止められた。

内閣府は、大規模な被害につながる地震を複数予測している。
「南海トラフ地震」は、関東から九州の広い範囲で
マグニチュード8～9クラスの地震と津波の発生が危惧されている。
「首都直下地震」は南関東域でマグニチュード7クラスと予測。
いずれも今後30年以内に70%と高い確率が示されている。

さらに内閣府は、「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震」の想定を昨年公表。
30年以内に60%の確率で地震が発生し、北海道から東北の太平洋側で、
東日本大震災以上の津波が発生する可能性を示した。

想定が現実となるのは、30年後かもしれないし、明日かもしれない。
日本は約2千もの活断層がある地震多発国。
平成28年の熊本地震は、30年以内にわずか1%の確率とされていた。

いつ、どこで起こるか分からない自然災害から、命、暮らしを守るために。
私たちができることは「備える」こと。
過去の災害から学び、次の災害への備えを今日から始めよう。
「自助」「共助」「公助」の3つの「助け」、それぞれが絡み合う「助け合い」。
そこに、事前の「備え」が加われば、防災力は確実に高まるはずだ。

地震は止められない、けれど、風化は止められる。
記憶は薄れるが、記録は色あせない。
震災を知らなくても、学べる場所、方法がある。
個人で、家族で、地域で教訓を語り継ぎ、備えよう。
明日を、命を守るために――。

特集　語り継ぐ　完

参考文献　遠野市後方支援活動検証記録誌

【写真】3月11日、14時46分。穀町西公園で開かれた追悼式で黙とうを捧げる沿岸部出身者と遠野町3区の住民、関係者。約1分間、古里、被災地の方角を向き、思いを巡らせた。